

# 地域在住の高齢者における知恵と背景因子との関連性

船木 桂<sup>1)</sup>, 江口洋子<sup>1)</sup>, 田里久美子<sup>1)</sup>, 高山緑<sup>2)</sup>, 新村秀人<sup>1)</sup>, 三村 将<sup>1)</sup>

1) 慶應義塾大学医学部 精神・神経科学教室 2) 慶應義塾大学 理工学部

## 背景

わが国は現在、高齢化率が25%を越え、平均寿命が男女とも80歳以上に達し、世界でも類を見ない超高齢社会にある。高齢者の身体機能、認知機能の衰えを主眼においた研究は多くあるが、高齢者の知恵や生きがいなどポジティブな心理社会的特性に注目した研究は少ない。E.H.エリクソンは、パーソナリティはライフサイクルを通して段階的に発達するという生涯発達観を提唱している。65歳以上の高齢期では、これまでの自分の人生を反映し、自我の統合と絶望という課題に直面しながら、自らの生と死を受容し「知恵」を発達させるとしている。

本研究では、地域在住の高齢者における「知恵」の発達に、どのような背景因子が関係しているかを検討した。

## 方法

2015年5-6月、東京都荒川区をフィールドに高齢者の人口統計学的特性と「知恵」について郵送調査を実施した。住民基本台帳を用いて年齢（60代から90代）と性別で8層にわけて層化無作為抽出した1000名に郵送調査を行い、回答を得た235名（男性121名、女性114名）を解析対象とした。

「知恵」の評価にはエリクソン心理社会的段階目録検査（中西・佐方、1993）の第8段階、統合性の項目の総スコアを使用した。エリクソン第8段階総スコアを従属変数、年齢、性別、就学年数、同居人の有無（独居、配偶者、子供、孫）を独立変数として重回帰分析を行った。また年齢や性別による「知恵」の発達の相違が考えられ、対象を75歳未満、75歳以上と男性、女性に分けてそれぞれ重回帰分析を行った。

### エリクソン第8段階、統合性の質問項目

- 私は、自分が死ぬことを考えると不安である\*
- 私のこれまでの人生は、かけがえのないものだと思う
- 私は、生きがいをなくしてしまっている\*
- 私は、悔いのない人生を歩んでいる
- 私は、自分の死というものを受け入れることができる
- 私には、もっと別の生き方があるのではないかと思う\*
- 私の人生は、失敗の連続のように思う\*

\*逆転項目

## 結果

Table1に対象の人口統計学的特性を示す。

項目	値
年齢, mean ± SD (range) (歳)	77.5 ± 9.7 (60 - 98)
性別, N (%)	男 121 (51.5) 女 114 (48.5)
就学年数 (n = 233), mean ± SD (range) (年)	11.2 ± 2.8 (5 - 19)
同居者数 (n = 216), mean ± SD (range) (人)	2.3 ± 1.3 (1 - 8)
独居, N (%)	56 (23.8)
配偶者と同居, N (%)	129 (54.9)
子供と同居, N (%)	82 (34.9)
孫と同居, N (%)	19 (8.1)
エリクソン第8段階総スコア, mean ± SD (range) (点)	17.5 ± 4.1 (4 - 28)

Table2に重回帰分析（強制投入法）の結果を示す。**年齢は正の相関をもって有意にエリクソン第8段階総スコアに影響した (p<.001)**。また、**孫との同居も正の相関の傾向を示した (p<.10)**。

Table2. 重回帰分析結果

従属変数	独立変数	β	p
エリクソン第8段階総スコア	年齢	.285	<.001
	性別	.034	n.s.
	就学年数	-.047	n.s.
	独居	.046	n.s.
	配偶者	.133	n.s.
	子供	-.020	n.s.
	孫	.119	<.10
	R <sup>2</sup>	0.114	
	調整済みR <sup>2</sup>	0.086	

次に対象を75歳未満、75歳以上に分け重回帰分析（強制投入法）を行ったが、5%水準で有意にエリクソン第8段階総スコアと相関する独立変数を認めなかった。

Table3に男女別の重回帰分析（強制投入法）を示す。**男女ともに年齢はエリクソン第8段階総スコアに正の相関をもって有意に影響した。また、女性は孫との同居が正の相関の傾向であったが、男性は配偶者との同居が正の相関の傾向を示した。**t検定では、女性における孫との同居の有無のおいてのみ、エリクソン第8段階総スコアの有意な群間差を認めた (p=.03) (Fig1, Fig2)。

Table3. 男女別での重回帰分析結果

従属変数	独立変数	男性		女性	
		β	p	β	p
エリクソン第8段階総スコア	年齢	.261	<.05	.326	<.01
	就学年数	-.096	n.s.	.027	n.s.
	独居	.163	n.s.	-.032	n.s.
	配偶者	.271	<.10	.020	n.s.
	子供	.052	n.s.	-.127	n.s.
	孫	.085	n.s.	.185	<.10
	R <sup>2</sup>	0.123		0.130	
調整済みR <sup>2</sup>	0.076		0.082		

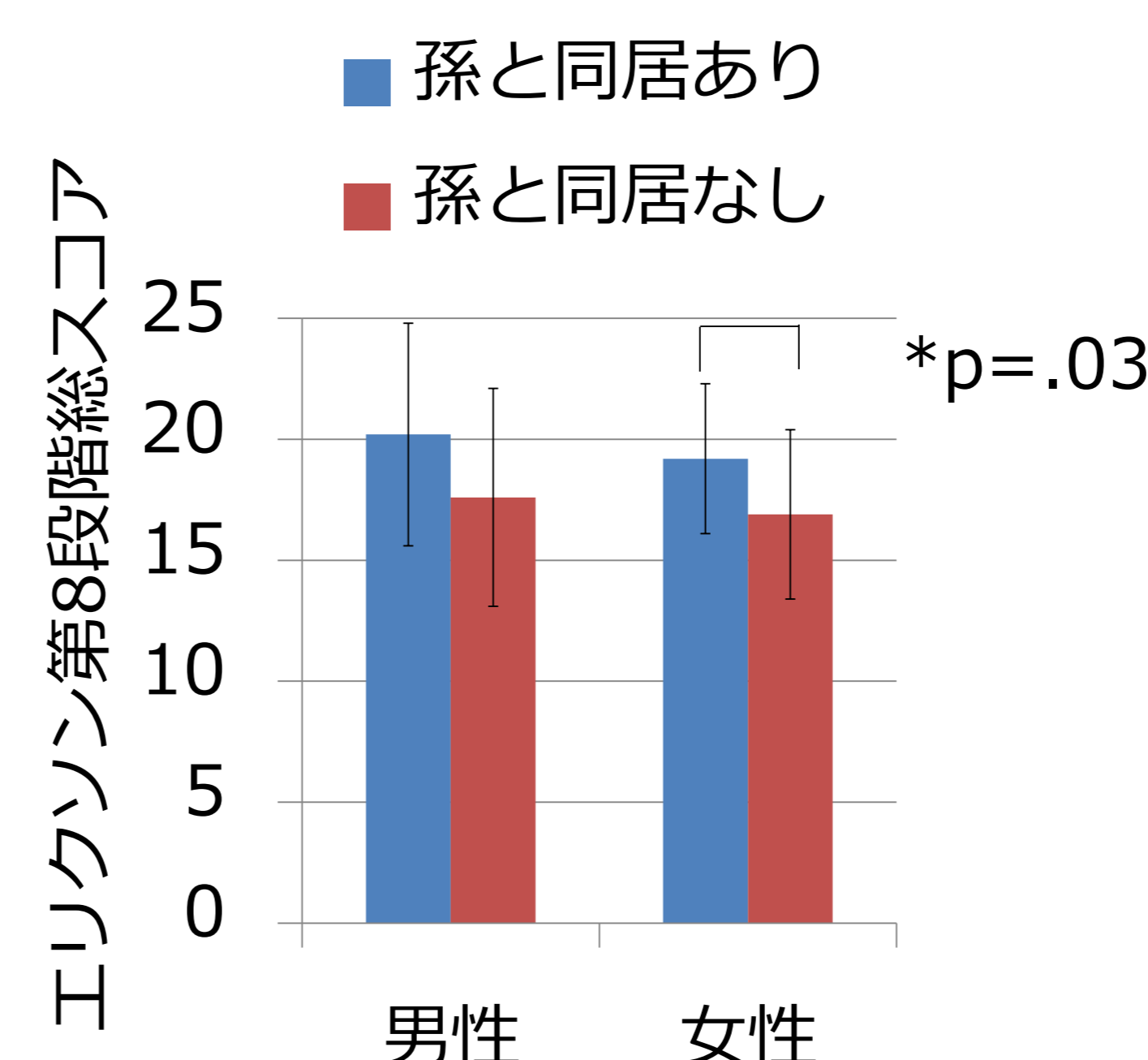


Fig1. 孫と同居の有無と男女別のエリクソン第8段階総スコア

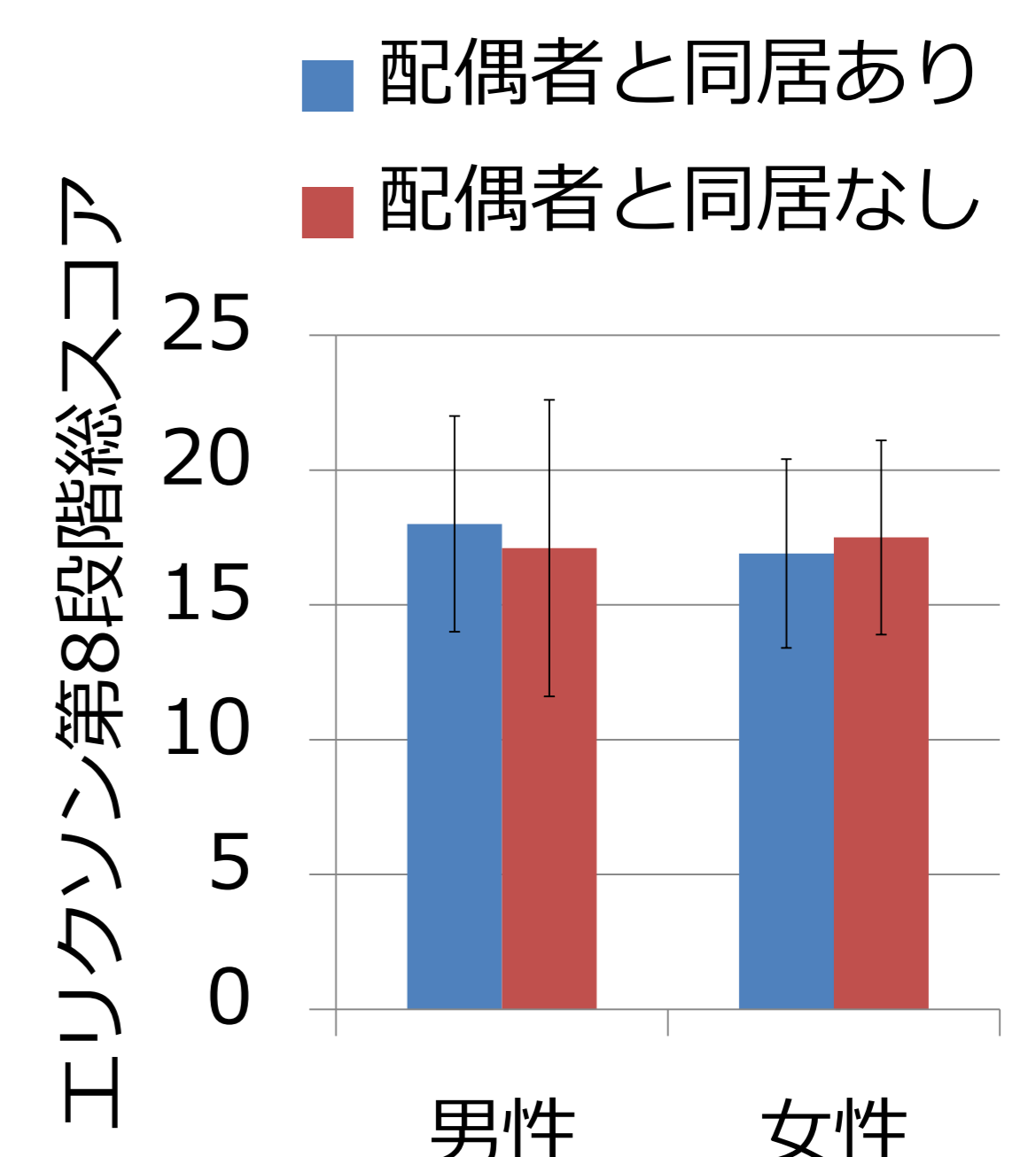


Fig2. 配偶者と同居の有無と男女別のエリクソン第8段階総スコア

## 結論

**知恵は年齢と有意な正の相関を示した。また女性は孫との同居が、男性は配偶者との同居がともに知恵と正の相関の傾向を示した。**男性と女性における知恵の発達、成熟に影響する因子の相違が示唆された。限界として、本研究で対象とした高齢者は、施設入所や入院をしておらず、自宅で自立生活をしている者が多く、比較的body機能、認知機能の保たれた群であることが挙げられる。今後は、生活の自立度の低い群についての検討も必要であると考えられる。

## 謝辞・利益相反

本研究に、ご協力頂きました荒川区民の皆様、荒川区高齢者福祉課の皆様にご感謝申し上げます。

本研究は、平成27年度 慶應義塾学事振興資金「高齢者の生活の知恵の評価」の助成を受けています。本研究に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業などはありません。